

## 事業報告書（令和7年度）

事業名 子どもをまんなかに『つながる』・『広がる』・『循環する』地域コミュニティ

団体名 えがおのじに 担当者名 窪田 薫

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

### 1. 活動内容（日時、場所、講師、参加対象者、人数、内容等）

#### ①防災ワークショップ

- ・日時：令和7年8月7日(木)9時～12時
- ・場所：竜之口小学校1階ホール
- ・講師：OKAYAMA お片づけチーム momo
- ・参加対象者：小学生、未就学児、保護者
- ・参加人数：63名
- ・内容：防災に関するワークショップのスタンプラリーを開催する。ワークショップは、防災トイレ体験、防災ピクトグラム学習、デコホイッスルづくり、防災クイズ、紙食器づくりを実施。生活に直結する「トイレ」「食」を体験的に学ぶとともに、小学校内にも掲示されている防災ピクトグラムや災害標識を題材に、自分の身近な環境と防災を結びつけて考えられるようにした。各ブースを回るスタンプラリー形式とし、集めた言葉を並び替えて「防災の合言葉」を完成させる仕組みにすることで、楽しみながら主体的に学ぶ工夫を行った。中学生および地域ボランティアが各ブースを担当し、多世代で子どもを支える体制を構築した。





## ②竜之口小学校 PTA バザー & フェスティバル

- ・ 日時：令和7年11月29日(土)11時～15時
- ・ 場所：竜之口小学校
- ・ 講師：なし
- ・ 参加対象者：誰でも
- ・ 参加人数：約400名
- ・ 内容：PTAバザーと地域有志が協働し、多世代交流の場を創出した。

土田町内会有志：綿菓子出店

愛育委員：健康ブース、お手玉づくり・お手玉遊び

婦人会：バルーンアートショー、和太鼓演奏

音楽サークル‘すまいる’：コンサート

中学生ボランティア：ゲームコーナー運営

高校生・中学生ボランティア：当日運営スタッフ

子どもから高齢者まで幅広い世代が参加し、会場のあちこちで自然な会話や交流が生まれた。学校教職員もコンサートに参加し、「学校と地域をつなぐ場」ともなった。



(様式第 8 号)





### ③防災ワークショップ

- ・日時：令和8年2月22日(日)13時30分～15時30分
- ・場所：竜之口小学校体育館
- ・講師：ファーストレスキュー株式会社 東山 幸史氏
- ・参加対象者：小学生、未就学児、保護者
- ・参加人数：69名
- ・内容：防災クイズ、段ボールの真っ暗迷路体験、ペットボトルライトづくり、防災トイレ体験を実施。学区在住の防災士にもボランティア参加いただき、専門家と地域人材が連携する形で実施した。





## 2. ESD の視点

### ①事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

#### (子どもの変容)

①③8月の防災トイレ体験を経験した子どもが、2月のイベントで未経験の子に使い方を教える姿が見られた。繰り返し体験することで、防災が「知識」から「行動」へと移行している様子が確認できた。防災ピクトグラムや災害標識など、自分の近くに防災についての情報や備えがある事に気づくことができた。また、防災トイレなど、防災が特別なものではなく、日常生活とつながっていることを実感していた。

②開催前から、地域でのイベントに興味を持ち、友達や家族と参加し、楽しむ姿が見られた。地域の小学校バザーという安心できる環境の中で、中高生ボランティアや地域の大人と自然に関わることで、多様な世代と交流する経験を得た。中高生ボランティアは役割を担うことで達成感を得、「来年も参加したい」と主体的な意欲を示した。

#### (地域の変容)

地域有志の協力により、出店数が増え、また、和太鼓の演奏やコンサート、健康ブースの出展があり、例年より幅広い年齢層の方が参加し、あちこちで話をしている様子が見られた。健康ブースのお手玉遊びでは、子どもたちは、保護者より年配の方にお手玉を教えてもらったり作り方を教わったり、世代を超えた学び合いが生まれた。

保護者も、健康ブースで普段関わる機会のない地域の方と交流する様子が見られた。

学校・地域団体・住民が協働することで「顔見知り」が増えるきっかけとなった。

### ②どのように学び合いを取り入れたか

#### ① 協働型・対話型の学び（防災ワークショップ）

防災ワークショップでは、子ども同士や保護者と一緒にブースを回り、協力してクイズに答えたり制作体験を行ったりする構成とした。さらに、各ブースで集めた言葉を並び替えて「防災の合言葉」を完成させる仕組みを取り入れ、体験を単発で終わらせず、学びを統合・振り返る時間を設けた。これにより、一人で学ぶのではなく「一緒に考える」、体験を言葉にして確認する、ゴールで答え合わせをし、気づきを共有する、という対話的な学びを実現した。

## ② 多世代交流による相互学習

小学生や保護者だけでなく、地域住民、高齢者、中高生ボランティアなど幅広い世代が関われるよう企画した。中高生ボランティアによる運営参加、地域有志による出店や健康ブース、和太鼓演奏やコンサートなど多世代型プログラムを通して、世代間で自然に関わる機会を創出した。子どもは地域の大人や中高生から学び、中高生は役割を担うことで責任感や達成感を得、地域の大人は子どもたちの姿から元気や気づきを得る、という双方向の学び合いが生まれた。

## ③ 体験後の対話と振り返り

防災イベントでは、体験の場で子ども同士や親子、防災士や講師と対話する時間が自然に生まれた。「自分には何が必要か」「家ではどんな備えができるか」「もしもの時どうするか」といった問いを共有し、体験を自分事として振り返ることができた。知識を受け取るだけでなく、対話を通して考えを深めるプロセスを取り入れたことが、学び合いの大きな特徴である。

単なるイベント開催ではなく、「地域で共に学ぶ場」を創出することができた。

## ③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

### ① 日常生活と結びつける体験設計

防災ワークショップでは、子どもたちの生活に直結する「トイレ」「食事」「明かり」「音（助けを呼ぶ）」をテーマに設定した。防災トイレ体験では、実際に座る、凝固剤に水を入れるなど五感を使った体験を行い、匂い・固まり方・テントの広さなどを体感することで、災害時の状況を具体的に想像できるようにした。紙食器づくりでは、身近な材料で食器を作る体験を通して、非常時でも工夫できることを学んだ。デコホイッスルづくりでは、自分が持ちたくなるように装飾し、実際に吹いて音の届き方を確認することで、「持つておく」から「使える」備えへとつなげた。ペットボトルライトづくりでは、懐中電灯にペットボトルを重ねることで光が拡散することを説明し、暗い部屋で実際に光の広がりを体験。知識を実験的に確認する形を取った。

「作る」「触れる」「試す」体験を通して、防災を抽象的な知識ではなく、自分の生活に引き寄せて考えられるように工夫した。

### ② 身近な環境と結びつける学び

防災ピクトグラムや避難マーク、災害標識をクイズ形式にし、小学校など自分たちの身近な場所にある表示の意味を考えさせた。さらに、避難時に大切な「合言葉」を並び替える活動を行い、答え合わせの際にその意味を全体で確認し合うことで、知識の定着を図った。防災を“特別な出来事”としてではなく、日常の延長線上にあるものとして捉えられるように設計した。

### ③ 疑似体験による実感づくり

真っ暗迷路では、停電時の暗闇、火災時の低姿勢避難が体験できた。近年、完全な暗闇を経験したことのない子どもが多いため、暗闇の不安感や視界の制限を体感することで、災害時の行動を具体的にイメージできるようにした。迷路内のクイズに答える仕組みにし、楽しみながら繰り返し挑戦することで、体験を深めた。

④ 振り返りによる定着

各イベント後にアンケートを実施し、何を学んだか、家でやってみたいこと、印象に残った体験を振り返る時間を設けた。体験で終わらず、言語化する機会をつくることで、学びを記憶に残し、家庭での実践へつなげることを意図した。

本事業では、「知る」だけでなく「やってみる」体験型学習、日常生活との接続、疑似体験による実感形成、振り返りによる内省を組み合わせることで、学びと実践を往還させる仕組みを取り入れた。その結果、防災を“他人事”ではなく“自分事”として考えるきっかけを創出できた。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

本事業では、防災ワークショップや地域バザーを通して、子どもを中心に保護者・中高生・地域住民が自然に関わる場を創出した。その結果、子どもが体験を通して学び、中高生が役割を担い、地域の大人が支えるという「子どもをまんなかにした関係性」が具体的な形として実現した。特に、防災トイレ体験をした子どもが、次のイベントで他の子に教える姿が見られたことは、子どもが受け身ではなく、学びを循環させる存在になったことを示している。

地域交流バザーでは、約 400 名が参加し、幅広い世代が同じ場で時間を共有した。高齢者がお手玉を子どもに教える、中高生が地域の子ともと遊ぶ、保護者が地域の方と会話をする、教職員もステージに参加する、といった様子が随所に見られた。単なる来場ではなく、交流が生まれている場面が多く確認できたことは、「顔見知り」の関係が広がった成果である。

防災ワークショップでは、体験型の学びを通して、防災は特別なことではなく日常とつながっていること、具体的に何を備えればよいか、災害時にどう行動するかを自分事として考える機会となった。特に、暗闇体験による避難行動の実感、防災トイレやライトの実体験、合言葉の確認により、知識が行動イメージに変わる様子が見られた。

アンケートや対話を通じて振り返りを行ったことで、学びの定着も図ることができた。

本事業では、中高生ボランティアの継続参加意欲、地域有志による出店や企画参加、防災士や専門家との連携など、運営側にも広がり生まれた。特に中高生が「来年も参加したい」と話していたことは、次世代の担い手育成という観点で大きな成果である。

本事業を通して、

- ・子どもが地域に大切にされていると実感する場が生まれた
- ・地域住民が子どもの成長に関わる機会が増えた
- ・防災をきっかけに地域のつながりが強化された

学びが一過性で終わらず、子どもから子どもへ循環する様子が見られたことから、当初掲げた、子どもをまんなかに「つながる」「広がる」「循環する」地域コミュニティづくりは着実に前進したといえると考えている。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくり

の発展・継続につながるか)

本事業を通して、多世代が防災を切り口に学び合い、「顔見知り」の関係が広がった。一方で、参加者の固定化や家庭での実践の広がり、地域人材の継続的な参画体制づくりが今後の課題である。今後は、家庭で取り組める防災実践の仕組みづくりや子ども・中高生が主体的に関わる場を充実させ、学びを地域内で循環させていく。また、学校や地域団体との連携を深め、本取組を岡山地域における ESD 実践のモデルとして発展させることで、持続可能な地域コミュニティづくりに貢献していく。